

南三陸町 震災と復興

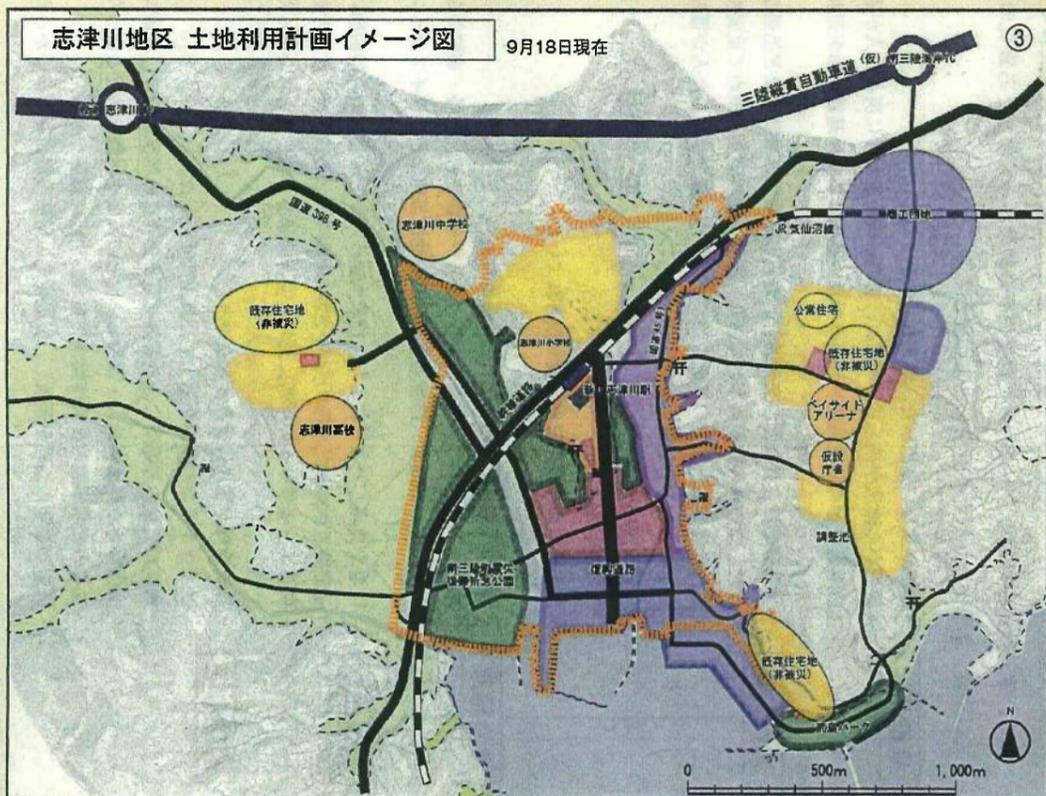


2011年5月撮影 ①



2011年6月19日撮影 ②

【制作】
株式会社 帝国書院



- ① 震災前の志津川付近の航空写真 (2011年5月)
- ② 震災後の志津川付近の航空写真 (2011年6月19日)
- ③ 志津川地区の復興計画案
写真: ①②(補写真企画)
図: ③南三陸町震災復興推進課

【凡例】

	居住ゾーン
	公共公益ゾーン
	産業ゾーン
	商業・観光ゾーン
	公園・緑地ゾーン
	農地・自然ゾーン
	施設誘致ゾーン
干	神社
卍	寺
	道路
	鉄道
	河川、海
	浸水区域
	被災市街地復興推進地域予定ライン

被災地からのメッセージ

このたびの大震災におきまして、あらためて犠牲になりました皆様にお見舞いを申し上げます。

3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震と、その直後に発生した大津波は、たくさんの人々の尊い命を奪い去り、私たちにとって生涯忘れることができない大惨事となりました。

その一方で、私たちは、このたびの震災で様々な経験をしました。また、地域における「人と人とのつながり」「絆」の大切さを再認識しました。私たちは二度と悲劇を繰り返さないために、震災から得た教訓を、しっかりと後世に伝えていかなければなりません。

未だ悲しみは癒えませんが、私たちは復興に向けて歩み始めなければなりません。復興への道のは、非常に長く、険しいと思われませんが、町民が一丸となって「南三陸町に住んでよかった」と思えるまちづくりを目指して、全力で取り組んでまいります。

南三陸町長 佐藤 仁

南三陸町 震災と復興 解説

南三陸町では、これまで明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波と過去100年の間に大きな被害を受けてきたが、そのたびに防災・減災対策を強化しながら、震災からの復興を遂げてきた。一方、町の発展は常に海と共にあり、豊かな海の資源は町に恵みをもたらしてきたことも確かである。

南三陸町には、1930年に河北新報社主催で選定された「東北十景」の人気投票で第一位になったほどの美しい海岸があった。また、水産資源が減少し枯渇状態にある昨今、町・漁協・遊漁船業者など地域全体で一体となった環境保全活動が2006年「全国豊かな海づくり大会」にて表彰されるなど、全国的に高い評価を得ていた。マダコなどは志津川湾で捕れる有名ブランドであり、カキやギンザケ養殖も盛んである。

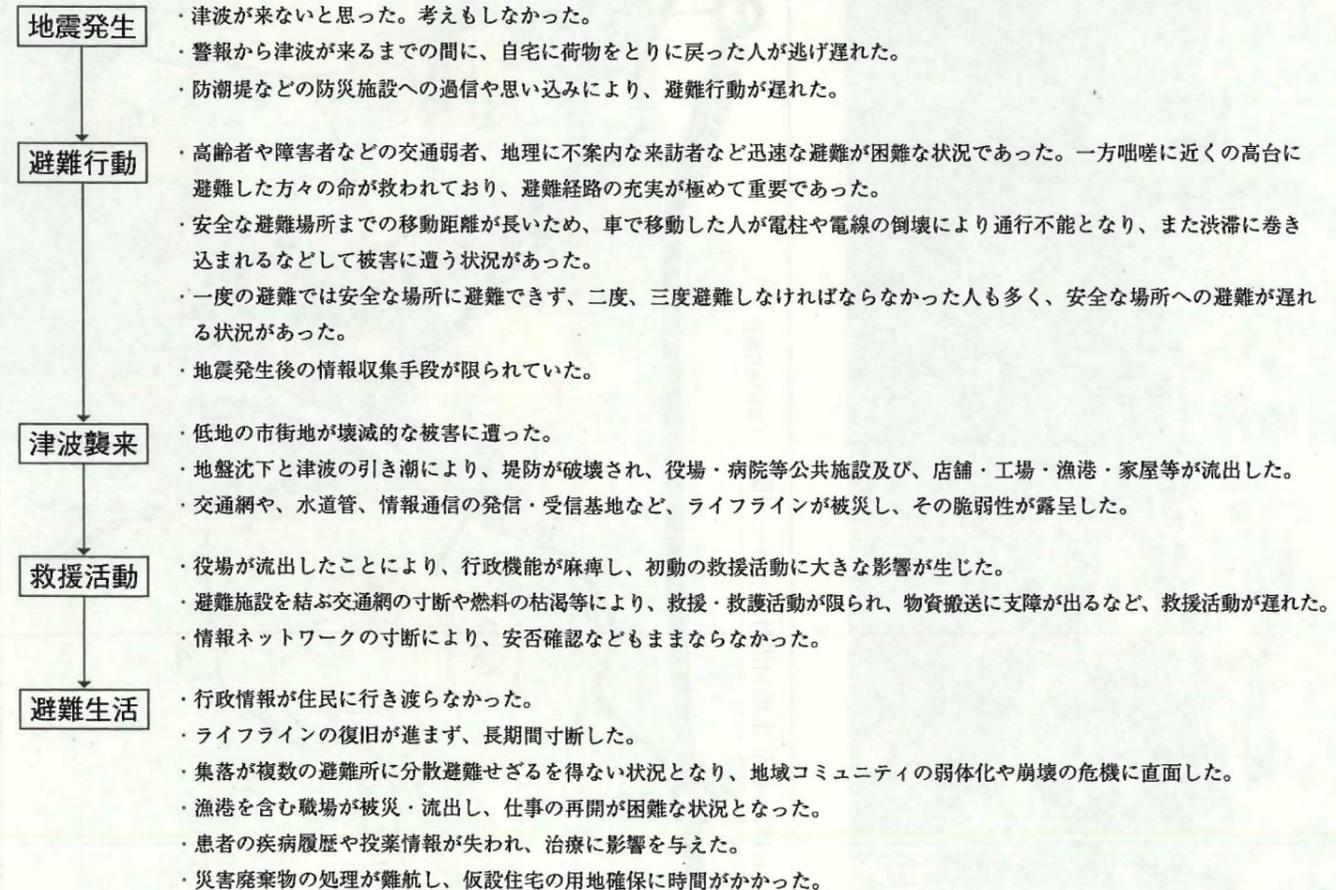
海と共存するにあたり、繰り返されてきた災害に対しても、町全体で対策に取り組んできた。何度も繰り返されてきた津波に対しては、海岸沿いに十数kmに及ぶ防潮堤を築いた。そしてインフラ対策のみならず、地域内の世代を越えた交流を重要視し、災害時にも「助け合える」コミュニティの形成に取り組んでいた。この街ではいにしえからの伝統文化や歴史を大切に、人々は豊かな自然があふれる町に誇りを持って生き続けているのである。

震災の教訓

この度の大津波は過去に対策を行ってきた津波の想定を、大きく上回るものであった。南三陸町の17,666人の町民のうち死者・行方不明者は793人に上り、最多時には半数以上の住民が避難を強いられた。中には、長きに渡り避難生活を送っている町民もいる。

今回の大震災により、これまでの「津波への備え」に関する考え方を大きく見直さなくてはならない。

以下、南三陸町が町民の方々に行った避難調査の結果からうかがえる震災の教訓である。この教訓を踏まえ、これからは「最大クラスの津波」を想定し、新たな対策をとる必要がある。



宮城県 南三陸町



復興の全体像と見通し—防災と減災の考え方—

南三陸町は復興した先の「まちの将来像」として「自然・ひと・なりわいが紡ぐ安らぎと賑わいのあるまち」と定めた。この復興計画は「防災と減災」という考え方に基づいている。

これまでは、過去に繰り返し発生していた「発生頻度の高い津波」を想定し、「逃げる」を基本にしながら、防潮堤などの海岸保全設備等を整備する「防ぐ」ということを対策としてきた。ところが、この度は想定を大きく上回る「最大クラスの津波」が発生し、低地のほとんどが壊滅的な被害を受けた。

この教訓を踏まえ、これからは「防ぐ」のほか、住まいの高台移転や低地の土地利用規制等による「安全な場所（高所）に住む」という考えを加えて、ハード・ソフトを組み合わせた総合的対策にシフトしていく。

復興の道すじとしては、この先10年間を「復旧期」「復興期」「発展期」という段階にわけて復興を行う予定である。

復旧期：仮設住宅における心のケア事業などにより、生活環境が整い始め、新しいコミュニティが形成される。さらに、タコ漁や秋サケ漁、ワカメ養殖などが始まり、それにともない工場や市場が立ち始めるなど、漁港周辺のにぎわいが戻り始める期間。

復興期：高台に家が立ち始め、新しい街並みが形成されていく。経済的な面においては、農林水産業の復旧のみならず新しい企業が立地するなどし、雇用機会が徐々に広がっていく期間。

発展期：高台への移設がほぼ完了し、公共施設の準備が始まる。そして街のにぎわいの復興とともに、観光客等の街への来訪者が増え始める期間。

土地利用のあり方

現時点は「復旧期」にあたるため、インフラ整備において必要な土地利用方針を固めている。

南三陸町は町民意向を踏まえた新しいまちづくりを進めるために、本年7月に全世帯を対象に「復興まちづくりに関する意向調査」を実施した。調査結果は、「これから住みたい場所を選ぶ際に重視すること」という項目で、「津波に対する安全性」(62.6%)が最も高く、「自然災害に強いまちづくりで重要なこと」については、最も高い回答が「住まいの高所への配置」(68%)という結果であった。

同月に開催された「震災復興計画地域懇談会」では、「具体的な移転場所選定や移転事業を進める際には町民の意向を重視する」といった趣旨の意見があり、賛同を多く得た。南三陸町は今後も必要に応じて、意向調査を行い、町民の意向を確認しながら復興を進めることとしている。

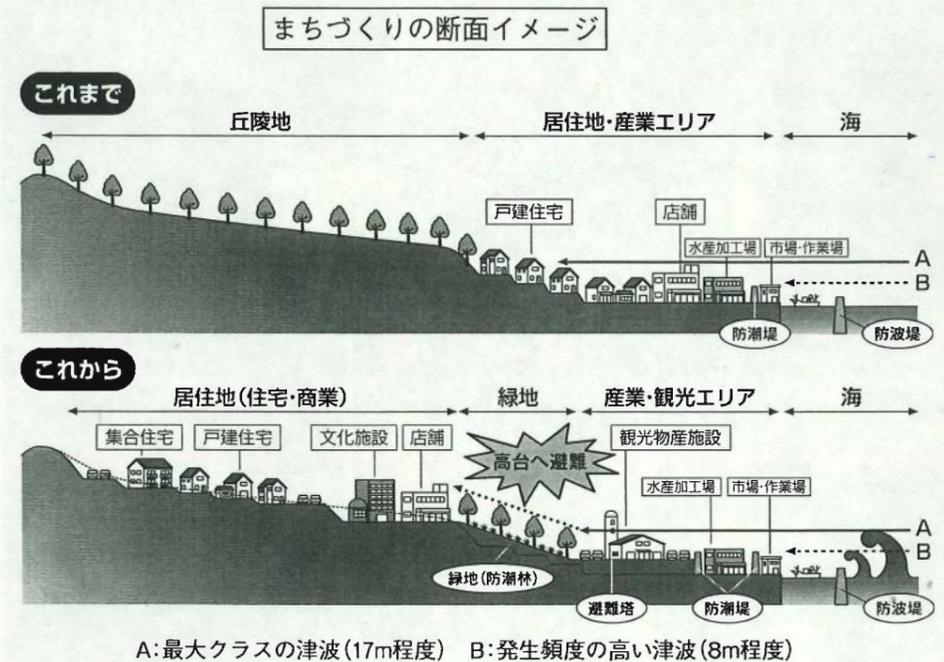
ポスターの表面に掲載されている復興計画案などは、様々な復興構想ゾーニング（土地利用計画において、用途ごとに区分して一団の地域又は地区の指定を行うこと）に基づいて行っている。下の図が土地利用断面図である。

居住ゾーン・公共公益ゾーン：より安全性の高い場所が求められるため、高台に機能を配置する。

公園・緑地ゾーン：復興の象徴であり、災害時には緩衝帯として機能する、多面的な役割を担う公園を整備する区域。安全上、居住地としての利用を制限する。

産業・商業・観光ゾーン：水産業の再生に必要な市場・作業場・水産加工施設などを効果的に配置する区域。港町らしい賑わいと魅力ある店舗などが並び、観光交流施設を設ける区域。

道路・鉄道：幹線道路や鉄道は災害時の交通機能を確保、津波からの多重防御機能を確保するため、盛土による嵩上げを行う。さらに産業・商業・観光ゾーンと高台を結び、復興のシンボルとなる道路（復興道路）を整備する。志津川駅（JR気仙沼線）は高台に配置する。



注：記載内容は、2011年9月18日付で南三陸町震災復興計画（素案）として発表されたものを参考にして作成したものです。これは南三陸町の意見であり、これから国や宮城県に要請して実行する予定です。南三陸町ホームページ <http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/>